第139回「萩句会報告」 (順不同) 日時 2021年12月13日(月)14時~17時

兼題 「日めくり (暦)」「冬眠」

(九品仏にて)

川井素山 ○緑青の門が切りとる冬紅葉

冬眠の森の狭まる獣道 道の駅今朝生みたてと寒卵 抽斗のすつと開かぬ夜冬の雷

保井寶正 ○日めくりの名句巡りもあとわずか

月の影十字にかかるクリスマス 瞼とじ陽を尊べり日向ぼつこ 冬眠やひもじき命彷徨す

佐久間喬 ○我にさえ読めぬメモ書き古暦

立ち話はづみて続く冬ぬくし 冷えるねとあいさつ返す冬帽子 冬の夜路地また曲がるかよい道

丸山酔宵子 〇跳ぶ如く銀杏落葉へペダル踏む 日が暮れて紅葉明かりのねねの寺

掃き澄む白砂波紋に舞ふ枯葉

夕時雨艶かに濡れる二寧坂

吉田啓悟 ○うつの日はうつを愉しむ暦果つ

冬鴎水上バスの上に鳴く 足跡が沖をふみしめ冬の海

ふぐはふぐ伊万里の皿でないけれど

青木英林 〇日めくりを配りし酒屋閉店す

海鼠腸を肴に爺の与太話 我もまた冬眠したきコロナ禍や ストーブの炎メラメラ騒めけり

山本草風 ○朱が入る父の原稿文化の日 飴色の古き暦や無人駅

> 雪掘りの汗で消えゆく屋根の雪 目をあけて自在の鮟鱇いさぎよし

渡辺鯨波 ○寂聴の法話は枯野案内人 古暦病五つの通院日 着脹れて緑黄色の野菜食う 小春日の呪文のようなゲノムかな

後藤克彦 ○伝法な口も少なし一の酉 日めくりの残り数えて財布見る 山茶花や散つて自慢の外座敷 酉の市コロナ不況の愚痴ば

原 晶如 〇日めくりを剝がせぬままの日のままに 群れなして冬眠知らぬ鯉の口 何よりも干せる蒲団の陽の匂ひ 竹垣のひしやげていたり竜の玉

永井正孝 ○年の暮れ日めくりの耳峙てり土起こしカエルの眠り妨げり晦日そばみなして鐘を数えけりお会式の太鼓町内一巡り

佐久間たか子○古暦旅の終わりは凱旋門 風花に恋しや臓に温きもの 極月の神のもどりて精気あり 薪割の響きどこまで冬木立

金森純女 ○暦巻く逢えなくなりし人の数 木の葉降るゆらゆら立ちし幼子に 子どもらの食べぬ鱈鍋つつきつつ 白菜にピンクの帯やむちむちと

青葉ひかる ○麗しき花の暦に心弾み 山茶花の濃淡ピンク競いあい 傷つくも日にち薬に溶ける氷 逝きし人の生誕日なり木枯らしの

## 次回「萩句会」

日時 2022年1月10日(月)14時~17時 場所 下目黒住区センター第一会議室

兼題『水餅』または『若菜摘』一句 当季雑詠 三句

会議室は3密を避けるため広い部屋で、マスク着用で行います。 アルコール消毒も十分に行います。 当日欠席となる方は投句をお願い致します。 投句の締め切りは1月7日(金)です。